

井上靖

緑の仲間
あすなろ物語

あすなろ物語
緑の仲間

井上靖

新潮社版

あすなろ物語・緑の仲間

〈井上靖小説全集 6〉



昭和47年11月15日印刷
昭和47年11月20日発行

定価 650円

© Yasushi Inoue, 1972,
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一電話
東京二六〇一—一—郵便番
号一六二振替東京八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

落丁・乱丁本はお取替え
いたします

目次

あすなろ物語	五
緑の仲間	一二
あすなろう	二五〇
蜜柑畑	二六七
氷の下	二七四
滝へ降りる道	二八九
晩夏	二九七
少年	三〇七
驟雨	三二〇
投網	三三〇
默契	三三八
白い街道	三三七
颱風見舞	三五一

ざくろの花

帰郷

神かくし

自作解題

三六

三七

三九

四一

装画
加山又造

井上靖小説全集

第6卷

あすなる物語

深い深い雪の中で

鮎太と祖母りようの二人だけの土蔵どくらの中の生活に、冴子という十九歳の少女が突然やって来て、同居するようになったのは、鮎太が十三になった春であつた。

冴子という名前は、それまでに祖母の口から度々聞いていたが、鮎太が彼女の姿を見たのは、その時が初めてであつた。

鮎太はなんとなく不可いけないものが、静はづ穩な祖母と自分の二人だけの生活を攪か乱しにやつて来たような気がした。そうした冴子への印象は、彼女の初対面の時の印象から来たものか、冴子という少女に対する村人の口から出る噂うわさがそうした余り香かほしくないので、それがいつとはなしに、鮎太の耳に入ってきたことに依よるのか、それははっきりしな

かつた。あるいはその両方であつたかも知れない。

その日、鮎太が学校から帰つて来ると、屋敷と小川で境さかいして、屋敷より一段高くなっている田圃たんぼの畔道はなみちを両肘を張るようにして、ハーモニカを吹いて歩いている一人の少女の姿が眼に入つた。少女と言っても鮎太よりずっと年長である。

村では見掛けない娘であつた。薄ら寒い春の風におかつばの髪を背後うしろに飛ばせ、背後で大きく結んでいる黄色い兵児帯へいりおびの色が、鮎太の眼には印象的であつた。

鮎太も畔道を歩いて来たが、その自分とはずっと年長の少女と正面からぶつかるのを避けて、畔道の途中から小川を越えて、土蔵の横手の屋敷内へと飛び降りた。

屋敷内へ飛び降りると、地面が低くなっているため、鮎太の視野から少女の姿は消えた。鮎太は教科書の入っている風呂敷包みを地面へ置くと、傍の柿の木に攀よじ登つてみた。少女は相変らずハーモニカを吹きながら段々畠の畔道を歩いていった。

鮎太がその少女を見守っているうちに、彼女は次第にこちらに近寄つて来たが、柿の木に登っている鮎太の姿を眼に留めると、視点を据えたような見入り方で、じいっと鮎太の方を見た。その黒い大きい眼が鮎太を驚かせた。一体この少女は何者だろうかと思つた。

もしかしたら、冴子かも知れない、鮎太はふとそう思った。

冴子という半島の突端の港町の女学校へ行っている少女が祖母の身内^{みうち}にあり、その少女の余り香^{かほ}しくない評判は、この村から同じ女学校へ通っている二、三人の娘たちに依って、この村へ伝えられていた。

鮎太は冴子という年長の、祖母の身内だという少女を、何となく美貌の少女として想像していた。彼女に関する噂の性質からすると、彼女はどうしても美貌でなければならぬようであった。

鮎太は柿の木から降りると、土蔵の中へ駆け込んだ。あのように美しい少女は、冴子でなければならぬと思ったし、あのような不良は（鮎太にはハーモニカを吹いている少女が、そう見えた）、冴子以外にはないだろうと思った。

薄暗い板敷の横手の階段を上がって行くと、祖母の姿は見えなかったが、見慣れない鞆^{たも}が一つ、鉄の棒のはまっている北側の小さい窓の傍の畳の上に置かれてあった。鮎太はやはり冴子が出来たのだと思った。

鮎太は幾らか興奮していた。二階から降りると、直ぐ部落の子供たちの集り場所になっている青年集会所の前へ出掛けて行った。

鮎太はそこで、他の子供たちと、鉄棒にぶら下がったり、

角力^{すもう}を取ったりして、夕方までの時間を消したが、時々、心の中で「冴子が来た！ 冴子が来た！」と思った。が、誰にもまだそのことは口外しなかった。

そして、平生より遅く、春の日がすっかり暮れて、街道の両側にある家々に燈が入ってから、鮎太は家へ帰って行った。

階段を上がって行くと、冴子は祖母と夕食の膳に向かうとしていた。

「これが坊主！ 思ったよりましな子じゃあないの！」

そんなことを、冴子は初めて彼女の前に出た鮎太を見て、祖母に言った。明らかに敵意のこもった言葉であった。

「幾つ？」

「十三だ」

「ふん」と、十三であるという事さえが、彼女にとっては腹に据えかねる事のようにであった。

「みんなあんたをちやほやするが、冴子もそうだと思うと当てが違つてよ」

そう言つて、冴子は村では珍しい額で切り揃えたおかつぱの髪の下で、ちょっと怖い眼をして見せ、それから今度は優しく笑った。

鮎太は、そうした冴子に半ば見惚^{みと}れていた。村の娘の誰よりも色が白く、眼は大きく澄んでおり、表情は見るから

に生き活きとしていた。

祖母のおりようは、そんな冴子の毒のある言い方に気付いていなかった。五、六年前から、耳が遠くなっている、鮎太は祖母と話をする時は、いつも口を彼女の耳もとに持って行って、大きい声を出さなければならなかった。

鮎太は、毎日の日課の一つであったが、祖母の酒を一台買うために、平生より少し違ふむつりとした表情で五合瓶を持って家を出て行った。

冴子の言うように、鮎太は村人から、他の子供たちとは区別されて「梶かじの坊ちゃん」と呼ばれていた。

天城の南麓の小さい幾つかの部落では、梶家は昔から代々の医家を通っており、他の農家とは格式が違うものとされていた。十三代目が鮎太の父であり、これも医者であったが、彼は村では開業せずに、陸軍に仕官して、軍医としてもう何年も任地を転々としていた。

従って、三百年の樹齢を数えると言われる椎の老樹を玄関口に持っている梶家の大きい家屋敷は、鮎太の生れる前から天城営林署に貸してあり、その代々の署長官舎のようになつていた。鮎太が知っているだけでも、三代の署長の家族が入れ替り立ち替り住んでいた。

そして、その屋敷内にある土蔵だけは確保して、そこに

祖母と鮎太が住んでいる。

祖母おりようは、村人の間ではひどく評判が悪かった。と言うのは、もともと彼女は梶家の人ではなく、梶家の先代の玄久の妾であつたが、それが玄久の死後、村の収入役と結託して、戸籍を書き替えて、玄久の後妻という形で梶家へ入り込んでしまったからである。

従って、鮎太の両親にとつては、おりようは戸籍上では義母になつていたが、梶家にとっては謂わば家乗つ取つた不倶ふく戴たい天の仇敵と言つていい人物であつた。

祖母おりようが、こうした事情を知っている村人からよく思われないのは、極めて当然なことであつた。

おりようが鮎太を両親の手から引き取つて離さないのは、梶家の将来の跡取り息子である鮎太を自分の手許に置くことに依つて、謂つてみれば自分の生活の保証を得ているようなもので、実際にまた彼女自身そうした考えであつたらうし、誰からもそう見られていた。

村人は、鮎太のことは「梶の坊ちゃん」と呼んでいたが、おりようのことは、田舎者の依怙いこ地から、おりようさんとか、おりよう婆さんとか呼んで、多少の輕蔑けいべつと憎惡をその中にこめることを忘れなかった。

しかし、鮎太は六歳の時からこのおりよう婆さんに引き取られていたので、すっかりこの戸籍上の祖母になつて

いたし、祖母もまた、鮎太に親身の愛情を感じていた。誰に判らなくても鮎太にはそれが判っていた。

毎月、都会の両親から、二人の生活費を送り届けられた。おりよう婆さんはその生活費を切り詰めて、自分の酒代と、それから自分にとっては唯一の血縁者である、半島の突端の港町で飲食店を開いている妹のもとに送る幾らかの金を捻出していた。その金は妹の一人娘である牙子はなこをその町の女学校に通わせる学費であった。おりよう婆さんは、その姪の学費を、毎月郵便局から六里隔たった港町へ送金していたので、この事は村では誰一人知らないものではなく、これが村に於けるおりよう婆さんの悪評をより決定的なものにしていた。

そうしたおりよう婆さんに関する風評は、何となく、子供の鮎太の耳にも入っていたが、どうして村人が祖母のことを悪く言うのか、その理由はよくは納得行かなかった。

「すっかり坊は人質ひとじに取られて、喰い物にされとる！」

鮎太の身に集る村人の眼は、彼が両親から離れているという事も手伝って、常に同情的であった。

「自分が酒喰らうくらいなら、大切な坊にうまいものを喰わせればいいのに！」

そんな声も耳にはいった。

しかし、鮎太は、別に生活に不満はなかった。他人の眼

にはどう映ろうと、結構祖母に可愛かわがられて育っていた。何年も祖母の皺しわくちやな両脚に挟まれて寝ていたし、夕食の時は、祖母から彼女が若い時祖父と共に行ったという日光や、身延山や、それから京大阪の町の話を聞いた。そんな話をする時の祖母の眼が鮎太は好きだった。そして他処ほかからの貰いものがあると、祖母は自分ではそれを食べないで、鮎太に食べさせた。そして、村の子供たちの名はみんな呼び棄てにしたが、鮎太のことは、「坊！ 坊！」と呼んでいた。

鮎太にとっては、詰まるところ、祖母はいい祖母以外の何ものでもなかった。喰いものにされてもいいなければ、人質にされている気持もなかった。離れている両親に対する思慕は少しも涌かず、父や母や弟妹のいる遠い都会の家は、夏休みのある期間だけ帰らなければならぬ固苦しい窮屈な場所であるに過ぎなかった。

祖母は牙子の学費を負担して、自分の身内へ肩身広い思いをしているわけだが、それでも村人の思惑おもわくを考えてか、牙子を自分のところへ呼ぶことはなかった。しかし、毎年夏休みに、村人の誰かを頼んで鮎太を都会の両親の許もとに送り（これは鮎太の両親からの要請に依るものであった）、自分一人になると、自分は自分の出生の地であり、何人かの僅かな肉親の者が住んでいる半島の突端の港町へ馬車に

乗り、山を越えて出かけて行つた。つまり、鮎太も祖母のおりようも、毎年夏になると、別々にそれぞれ肉親のいる場所へ里帰りをするという恰好であつた。

だから、勿論、おりよう婆さんは自分の唯一人のお依んな姪を部落へは呼ばなかったが、彼女とは毎年のように顔を合せているわけであつた。

鮎太は、祖母が鮎太と同じように、自分が学費を出している一人の姪を可愛がつていることを、彼女の平生の言葉の端し端しから知つていた。

鮎太が学校で友達にいじめられたりすると、祖母は、躰を二つに折り曲げて、地面を嘗めるような恰好で、手を腰の背後で振りながら、学校の校庭へ姿を現わした。鮎太は教室の窓からそうした祖母の姿を見ると、絶望的な氣持になつた。鮎太が祖母について嫌なことはこの事だけだつた。「やい、どこの家の子じゃ。家の坊をいじめたのは。先生か何か知らぬが、どこの馬の骨か判らぬ他国者めが！ 大体お前さんが悪い！」

祖母は窓の下から長いこと喚いて教師に毒づいた。これは鮎太の成績が一つだけ下がつても同じことだつた。

これと同じように、冴子の悪口が彼女の耳に入つても彼女は、千里の道を遠しとせずに出掛けて行つた。

「わしの姪を一度でも見たことあるかや。ろくでなしのお

のが娘の言葉を真に受けくさつて！」

そんな時、鮎太は祖母から少し離れた所で、祖母の毒舌の終るのを、子供心に孤独な氣持で待つていた。大抵の場合相手は農家だったので、囲炉裏の薪の焰の光で、土間に立つてゐる祖母の顔の半面は、鮎太には堪まらなく醜く見えた。

そして当の問題になつてゐる自分よりは年長の、未知の少女の顔が、その反動か、鮎太の眼には奇妙に美しく浮き上がつて見えて来るのであつた。

鮎太は、冴子が間もなく、自分と祖母の二人の生活から脱け出して行くだろうと思つていた。それが望ましくもあり、また望ましくないものにも思えた。自分と祖母の二人だけの静穏な土蔵の中の生活が冴子という闖入者に依つて、乱される不安もあつたし、一方では反対に、單調な自分たちの生活に突然飛び込んで来た、一匹の華やかな色彩の蛾のようなものを失いたくない氣持も強かつた。

冴子が初め鮎太に會つた時、鮎太に邪慳な言葉を浴せたのは、冴子が梶家に対して、よからぬ感情を持つてゐるためで、勿論それは、彼女の伯母を梶家の犠牲者と思ひ込んでゐるところから來ていた。そして永年の、梶家に対して自分たち一族の肩身の狭さに対する反撥は、冴子の心の中

では相当強いものらしかった。

「おばあちゃんは一生涯可哀そうだったのよ。お婆さんにさせられ、可哀そうだったと思わない？　そして年取つたらこんな薄暗い蔵の中に押し込められてさ。さあ、可哀そうと言ってごらん、言えるでしょう」

牙子はある夜、隣の床の中で、くると鮎太の方へ顔を向けて言った。

「可哀そうだ」

鮎太は、牙子の前では自分が彼女の言うなりになるのが自分でも不思議だった。

「おばあちゃんでも、私たちでも、あなたの家とは家柄は違わないのよ。威張ったりしたら承知しないから」

「威張ったことなんか無いもの」

「じゃあ、いいけど」

「あなたは私の事を牙ちゃんと言うわね。お姉さまと呼びなさい」

「お姉さんってか」

「お姉さんじゃないの、お姉さま」

鮎太はそのお姉さまという呼び方だけは出来なかった。しかし、心の中では、そうした呼び方をして、着飾って、どこかの縁日を歩いている自分と牙子の、上流家庭の一組の姉弟でもあるような姿を想像して、心の昂ぶって来る

のを覚えた。

十日程経って、鮎太はもう牙子が自分と祖母の生活から飛び去って行かないことを知った。それは、牙子が、女学校で下級生から万年筆と時計を取り上げた事件をひき起し、そのために一年停学になり、郷里の町にいくくて、ここへ来ているのだという噂が村へばら撒かれたからである。それは勿論、日曜ごとに村へ帰って来る牙子と同じ女学校へ行っている村の二人の女学生に依って伝えられたものであった。

「知らないのはおりよう婆さんだけさ」

そんな同じ言葉を、鮎太は何人かの村人が話しているのを聞いた。しかし、鮎太は牙子をそうした悪人とは到底思えなかった。そうした噂をばらまいた郵便局長の娘と、山葵問屋の娘を憎んだ。

牙子が鮎太の生活へ入って来て二ヵ月程経った頃のことだった。

鮎太はある夕方、牙子に、庭の隅の竹藪の前へ呼ばれた。

「伊豆屋の川に向かった奥の新しい部屋を知っている？」

「知っているよ。青い硝子が嵌ま^はまっている部屋だろう」

伊豆屋というのは部落に二軒ある溪谷の温泉旅館の一つであった。

「玄関からでなく、そこへ入って行ける？」

「行けるさ。川の石垣を上って行く」

「そう、そして、どうする」

「庭へ出て、櫓のところを廻って、離れの横を通って——」

鮎太にとっては、伊豆屋の庭は隅から隅まで知っている所だった。夏になると、伊豆屋の直ぐ半町程の下が子供たちの泳ぎ場になった。毎日のように、子供たちは蝗いんこのようにそこらを飛び歩き、伊豆屋の広い庭にもぐり込んだし、宿の人の眼を盗んでは、浴場へも冷たい躰からだを温めに行った。「じゃあ、あんたに頼むことにするわ。夕御飯済んだら、もう一度ここへいらっしゃい」

鮎太は、如何なることを牙子から頼まれるか想像はつかなかったが、牙子のいつにない真剣な顔が、彼には満足だった。そして、理由の判らぬ興奮が彼の心を占領した。

夕食が済むと、鮎太は、言われたように、昼間牙子と会った竹藪の横手に出掛けて行った。二、三分すると牙子が出て来た。

「このお手紙を、そのお部屋にいる人に渡して来るのよ。いい？」

牙子はそう言つて、懷中から四角な封筒に入っている一通の手紙を取り出した。

鮎太は受取つて初夏の夕明りの中で封筒を確かめた。封筒の隅にはコスモスの絵が描かれてあつた。

コスモス 花

「どんな人？」

「男の人よ。鮎ちゃんも会つたら好きになるわ、きっと」それからちよつと考えていたが、

「先方で受取らなくても、置いて来るのよ。もしかしたら、持つて帰んなさいと言うかも知れない。そうしても、持つて帰つては駄目よ」

鮎太は持つて行くのは何でもないが、そうした複雑な取引は、ちよつと自分には難しいなと思つた。しかし、

「いい、よくつて!!」

牙子に眼を見入られて、きつとした表情で言われると、鮎太は口にてかけた言葉を飲み込んでしまわなければならなかった。

伊豆屋までは五、六町の道のりがあつた。細長い部落どくを縦断している街道を通して、部落の外れから、溪谷への道を降りて行つた。途中で共同湯から帰つて来た三年生の幸夫と四年生の留吉を誘つて、一緒に行つた。牙子から預かつた手紙は留吉に持たせた。

「秘密の使者だからな。口をきいたら駄目だぞ」

「うん」

留吉は手紙を帯の間に挟んで、自分もまた秘密の使者の一員に加えて貰つたことが彼の頬を上気させ、両の眼をきらきらさせていた。

幸夫は、竹の棒をどこからか拾つて来ると、それを腰にさして、一人で先きに駆けて行つた。坂道を降り切ると、川瀬の音がいつせいに立ち上つて来た。鮎太と留吉は磧へ降りて行つた。川の中の石を次々に飛び移つて行つて、一カ所だけ膝から下を濡らして浅瀬を横切ると、向う岸へと渡つた。そして伊豆屋の二間程の石垣に守宮のように張りついてそこをよじ登つて行つた。

伊豆屋の庭の地面へ舂を乗り出した時、斥候の幸夫が樹蔭から飛び出して来て、

「二人いらあ」

と言つた。

「二人って」

鮎太は意外だった。二人いられては手紙を渡す相手を知るのがに困ると思つた。すると、

「小父ちゃんと、あまっこや」

又、幸夫は言つた。あまっこ言うのは女の子供のことである。あまっこなら問題はないと鮎太は思つた。小父ちゃんの方へ渡せばいいからである。

鮎太は二人の家来を待たせておいて、自分一人出掛けようと思つた。そして留吉から手紙を受取ろうとすると、留吉はそこらをごそごそやっていたが、やがて、帯を解いて裸になり出した。

「どうした」

「どこかへやっちゃつた!」

鮎太はすっかりしよげ返つてしまつてゐる留吉の頭を二つ三つ小突いた。

三人は又、そこから今来た道を引き返して、紛失物を探すことにした。川を渡る途中で棄てない限り、道のどこかに落ちてゐる筈であつた。又、川を渡つて坂道へ出た。

「ああ、あそこだ、きつと」

留吉は小便をしたところを思い出すと、一人先きに坂道を駆けて行つたが、やがて駆け戻つて来た。坂道にただ一つある裸電気の光で見ると、駆け戻つて来た留吉は紛失物をこんどは帯には挟まないで口に銜えていた。

鮎太はそこで留吉と幸夫を家へ帰らせた。夕食を食べていないので腹が減つたと訴えたからである。

二度目に鮎太が一人で伊豆屋の中庭に立つた時、どこかの部屋からの宴会のさんざめきが川瀬の音に混じつて賑やかに聞えていた。

中庭をぐるりと廻つて行つた。八畳の部屋には、なるほど、小父ちゃんとあまっこがいた。小父ちゃんの方は何となく見覚えがある感じだったが、少女の方は初めてだった。便所の横手の植込みの蔭から鮎太は暫く二人の様子を窺つていた。

鮎太は、意気込んで来たものの、植込みの蔭から、明るい電燈の光の射している中庭へと自分の鉢を曝すことは躊躇された。手紙を渡す当の男の人より、彼の横で同じように寝そべって雑誌を読んでいる自分より一つか二つ年下の女の子の存在の方が邪魔だった。赤い綺麗な着物を着て、彼女は寝たまふ膝から下の脚を二本とも撥ね上げていたが、それが、その女の子をひどく活潑に見せていた。時々少女は顔を上げて、兄らしい男の方へ何か喋っては笑いかけていたが、いかにも都会の少女しか持っていないいかなる憐憫さがその美しい顔には溢れていた。

鮎太は十分か十五分、そこに立っていた。よほどこのまま帰ってしまうかと思つたが、冴子の顔を思い出すと、それもできなかった。

鮎太は犬が彼の立っている場所とは反対の方に姿を見せた時、それを機会に植込みから姿を出した。縁側は開け拡げてあつた。

「お姉さんがこれを寄越しました」

いきなり鮎太はそう言つて手紙を縁側に置いた。

男が黙つて立ち上がつて来た時、鮎太はこの男が、時々村の禪寺へ遊びに行く東京の大学生であることを憶い出した。この春も、彼は一カ月近く伊豆屋に泊っていた。大変な勉強家だという噂だった。鮎太たちはこの男の四角な帽

子が珍しくて、「大学生、大学生」と口々に言いながら、彼が村を引き上げて行く時、馬車の乗場まで背後からついて行つたものである。

男は頭を坊主刈にし、肩の張つた大きい鉢を持っていた。彼は手紙を取り上げると、部屋の隅の机の上に置き、

「君、何年生？」

と言つた。

「六年生です」

「蔵の中におばあさんと住んでいるの？」

「そうです」

鮎太は、この大学生が自分のことを知っているのが不思議だった。

「お坐り」

一刻も早くこの場所から退散したかつたが、鮎太は男からそう言われると、縁側に腰を降ろした。鮎太は棒編の着物と、縄のような帯と、先刻川を渡る時濡れて、砂埃をくっつけて汚れている藁草履が氣になった。

「お菓子あるだろう」

大学生が言ふと、少女はきれいな半紙の上にカステラを二切れ載せて持つて来た。それを縁側に置く時、彼女は意味のない笑いを鮎太の方へ見せた。堪まりかねて、

「僕、帰ります」

鮎太が言うと、

「そう、そこまで送って行って上げる」

大学生は立ち上がると、縁から降りて、庭下駄を履いた。少女は器用にカステラを紙に包むと、鮎太の方へ差出した。

鮎太にとっては、それは妙に脆弱な手応えのない紙包みだった。彼はそれを毀れないようにそっと手に攬むと、大学生の背後について歩き出した。

今度は川を渡る必要はなかった。中庭から明るい玄関の方へ廻り、そこから吊橋の方へ出た。吊橋を渡ると、道は少しの間川に沿って走っていた。

「君、六年生なら、来年は中学へ行くんだろう」

「そうです」

「勉強しないと駄目だな」

「――」

「都会の学校は難しいよ。勉強している？」

鮎太は、勉強はしていなかったが、黙って大学生の方へ頷いてみせた。急に自分が大人扱いにされているような変な気がした。

「人より二倍勉強するんだな。二倍勉強すれば二倍だけ出来るようになる。朝起きても学校へ行くまで勉強。学校から帰っても、又勉強。――そうすりゃあ、どこへだって入れる」

大学生は殆ど独り言を言っているような調子で喋っていた。

「君、勉強するってことは、なかなか大変だよ。遊びたい気持ちに勝たなければ駄目、克己^{こくぎ}って言葉知っている？」

「知っています」

「自分に克^くって机に向かうんだな。入学試験ばかりではない。人間一生そうでなければいけない」

鮎太は、この時、何か知らないが生れて初めてのものが、自分の心に流れ込んで来たのを感じた。今まで夢にも考えたことのなかった明るいような、そのまた反対に暗いような、重いどろどろした流れのようなものが、心の全面に隙間なく非常に確実な速度と拡がり方で流れ込んで来るのを感じた。不思議な陶醉^{もうそう}だった。

川に沿った道が、川から離れて、折返しに上り坂になる所まで来た時、大学生はふと立ち止まると、何かをびりつと裂いて、それをまるめると川の方へ投げた。

鮎太は、その時、大学生が破いたものが、先刻自分が彼に渡し、彼が机の上に置いていた牙子の手紙であることを知った。浴衣を肩までまくっている大学生の白い右腕の動きが、その時、鮎太には印象的だった。

「じゃあ、もうお帰り」

大学生の言葉で鮎太は頭を一つ下げると、そこから一人